

私の幼児教育論 VIII

保育の基本 (六)

神 沢 良 輔



三 保育の基本 (六)

——幼児とのかかわり合いの中で——

(VIII) 幼児を集合させるときは、保育者が先にその場所へ行く

(1)

私にとって初めての幼稚園の現場であった、四日市幼稚園に
たときの経験であるが、この幼稚園では、入園式の日、親子の
記念写真を撮影することになっていた。それは、入園式の日
は、親が晴れ着姿で必ず付き添ってくるということから、親を含
めた全員の写真がとれるということのためであつたらしい。もし
後日すると、わざわざ入園記念写真のために、親があらためて
来園するということになり、親の出席率も悪く、出席しなかつた
親の幼児がかわいそうだというこのためでもあつたらしい。確

かに入園式の日には記念写真を撮影するにはそれなりの理由があ
る。しかし、実際に入園記念写真の撮影となると、当時の五歳一
年保育児、五学級の親子の写真をとり終えるのには、最低一時間
はかかってしまうのである。だから、幼児たちは、わずかの式の
時間と、記念写真の撮影と、それを待つために、入園式にくと
いうことになってしまうのである。

すくなくとも入園式の日には、幼児は幼児なりにこれからの園
の生活についての期待と同時に、反面では緊張や不安をもって参
加しているだろう。だから、なにはさておき、このような幼児た
ちのもっている不安を解消してやるために、あすから始まる幼児
の園での生活についてのあらましを、からだで体験させてやる必
要がある。

でも、入園式に写真をとるためには、保育者は、ひとりひとり
の幼児に接したり、幼児と遊んだりして、幼児の気持ちを安定さ

せるといふことよりは、撮影のための順番を待っている幼児たちが、他の学級の中に入っていないか、また、待っている場所から離れてはいかないか、全員がそろっているだろうか、などというこのために気をつかってしまう結果になりかねないのである。

しかも、そこにいる幼児たちは、保育者としては初めて出会った幼児たちであり、入園のための準備などで名前については全員知ってはいても、それらが顔とは必ずしも一致してない幼児たちであり、また、ひとりひとりの幼児のもっている性格や行動特性については不明の幼児たちなのである。だから、保育者は、幼児のつけているクラス別の色のついた名札をたよりに、自分のクラスの子の動きを追うことだけに神経をすりへらすことになる。

また、幼児たちの方も、保育者については入園式での園長の紹介ではじめて知った大人であり、その大人と自分との関係について、当然ながらきわめて不安定であるということがいえよう。

そこでは、どうしても幼児とのかかわり合いをもつということが基本からはなれ、いかにして、幼児たちを管理していくかというところが中心になってくるのである。

(2)

このようなことから、保育者と話し合い、入園式の日には、記念写真の撮影は中止することにした。

そして、入園式のあとは、保育者は、まず幼児と遊ぶことになり、幼児との人間関係に入ることにした。しかし、そこに父兄が入りこんでは意味がないので、その間は、筆者が園長をさせられているという因縁から、親を集めて、約一時間、「幼児教育とは何か」ということで一席ぶつことになった。

幼児と保育者が去った式場は、主役のいない劇の幕あいのようなものではあるが、各保育室や運動場からは、保育者と遊ぶ元気なよい幼児の声が聞こえてくる。この声に安定感をもちながら親に話をするというのが、それからの毎年の筆者の仕事にされてしまった。

さて、このように入園式当日から保育をしたことは、第二日目からの幼児の安定感に大きな影響をもったようである。つまり、保育者と遊んだということで、朝の出会いでも、保育者に親近感をもつて接してくれるし、そこでの安定感、靴を下駄箱に入れることでも、通園服を所定の所にかかけたり、作業衣を着る場合にも自分から進んでしようとする意欲がみられたりするし、また、元気のよい幼児たちは、保育者の準備した環境の中へ、スムーズ

にとびこんでいって楽しく遊んでいるし、全体に落ち着きがみられるように思われた。

(3)

入園式の日このような行事の変更のため、記念写真の撮影は、四月下旬の親子での遠足の日になされることになった。この日は、それ以外に、いちばん始めに、親の方は、PTA総会をもかねることにし、それに参加してもらうことにした。そして、それが終りしたい学級ごとの記念写真を撮影するということがあるが、この時期になると、学級としてのまとまりもすこしずつできなくなるので、入園式にするのに比して時間もあまりかからずにできるようになってきているし、他の学級の撮影している時間も、保育者と一緒ならば待つことも可能である。

撮影が終了すると、徒歩で十分ぐらいの電車の駅まで歩き、そこからまた十分ぐらいの電車に乗り、さらに、そこから二十分ぐらい歩いて、さつきの美しい目的の小さな丘への遠足が始まる。

そこに着くと、自由行動となるため、親子つれだって三三五五適当な場所へと散っていく。保育者はそのあとで、親の参加しなかった幼児たちを集めると、同様に春の丘を散歩し、昼食をするということになる。

さて、昼食も終わり、ひと遊びしたので、帰途につくため集合の合図の笛が吹かれた。

五人の保育者のうち、三人は、予定の時刻より前に、集合する地点に帰ってきていた。集合の合図で、幼児や父兄たちは、あちこちから集合場所へと集まってきた。そして、集まってきた幼児たちを順番に並べ始めた。残りの二人の保育者はどうしているかなと思って見回すと、はるか遠方から、二、三人の幼児たちと手をつないで、スキップしながら楽しそうに、こちらへやってくる。まことに美しい心温まる風景である。

早く集まってきたその学級の幼児たちの中には、保育者を迎えるに行くものもいるし、「先生早くきて」と呼んでいるものもいる。

やがて、保育者も全員集まり、幼児たちの人員確認ということになった。早く保育者のきていた学級の幼児たちは、このときすでに保育者の顔を見て、安心して並んで待っている。だが、保育者のおくれた学級の幼児たちは、保育者のまわりに集まってなかなか並ぼうとしない。でもしばらくして、保育者の努力で、どうやら並ぶことができた。だが、保育者にとっては、他の学級に比べて、あまりにも手間どったり、並んだといっても並び方が雑然としているのが、気になったようで、ついに、

「私の組、なんで、こんなに、おうちやくな子ばかり集まった

んだらう” “早くしなさい” ということばがでてしまった。

(4)

このことは、よほど二人の保育者の心に残ったとみえて、園に帰るなり、保育者間の会話の中でもなされた。

この二人の保育者は、一人は、その年の人事異動で他園から転職してきた、経験年数数年の保育者であり、もう一人は、本年度の新採用の保育者であった。

この二人の保育者は、ともに朗らかで、幼児ともよく遊び人間関係もうまくいっていて、園内で幼児との生活においては、これまで、他の保育者の信頼を得ていたのである。

そこで、保育者の間で幼児の集合についての反省が以下のようになされた。

幼児を集合させる場合は、幼児は保育者をめあてに集まってくるのだから、保育者は、集合の場所にいち早く行って、そこで幼児を待つてあげることがたいせつである。集まってきた幼児たちは、そこにいる保育者と目が合い、またすこし話し合つて受容されることと安定して、並んで他の幼児のくるのを待つようになるのである。

もし、保育者の集合場所へくるのがおそいと、早くきた幼児た

ちは、保育者に自分のきたことを認めてもらいたいという感情が満足されずに不安定になり、ある幼児は、その場所から離れ、保育者を迎えにいったり、また、他の幼児は、不満足のまま、その場でいわゆるいたずらをして、気分をまぎらすような行動にでたりすることが多いし、そのようなとき保育者があらわれると、このような情緒の安定のために、保育者とのかわり合いの時間が必要となる。けれども、保育者は、おくれたということで、早く並ばせねばならぬということになれば、幼児は満足しないうまま、保育者の指示に従うということになり、うまく並べないという結果になってしまうのである。

このようなことは、当然わかっていることではあるが、いざ実際の場面になると、なかなかできないということであろう。遠足などの場合は、きわめて典型的にあらわれるが、園内の平素の保育においても、同様の場面はきわめて多いのではないだろうか。

このような場面を見落さないようにして、

“幼児を集合させるときは、保育者が先にその場に行って” 幼児を安定させてやりたいものである。

なお、この例に出した保育者は、その後、このような失敗をすることはなかったことを最後に付言しておきたい。

(暁短期大学)